

インビトロ(5)(6)

312 ヒトパピローマウィルス(HPV)検出キット「Viratype」の使用経験

館野円 小出博子 井上登美夫 佐々木康人(群馬大学核医学教室)五十嵐均(同中放核診療部)

HPVは、尖形コンジローマ、子宮頸癌、外陰部癌などの原因とされている。細胞内 HPV の存在証明法としては、細織診断や DNA プローブ法を応用したサザンプロット法が行なわれているが、手技が困難であったり、判定にも熟練を要する。Vira type は、RNA プローブ法を応用したもので、HPV DNA と³²P 標識 RNA をハイブリダイゼーションさせ、オートラジオグラフィで検出する。比較的簡便な検査であり、検体は擦過材料で十分である。また、判定にも熟練を要しないので、日常検査として使用することが可能である。本法により検査した尖形コンジローマ12症例中7例で、HPV6・11型が陽性であった。

313 扁平上皮癌における抗SCC 抗原モノクローナル抗体を用いた血清、組織中SCC 抗原量の測定と免疫組織化学的検討

宮川直子、木村良子、阿多まり子、越智香、藤井崇、飯尾篤、濱本研(愛媛大・放射線科)

我々は、血清 SCC 抗原測定が、各種扁平上皮癌において有用なマーカーであることを報告してきた。今回は、肺癌、食道癌、肺良性疾患について、免疫組織化学的に SCC 抗原の局在を明らかにするとともに、血清、組織中 SCC 抗原量を、定量し、正常組織と対比検討した。ほとんどの肺、食道扁平上皮癌組織の癌細胞質内に、特異染色が認められ、分化度と染色性に相関を認めた。正常組織および扁平上皮癌以外の癌組織には、特異染色を認めなかった。組織中 SCC 抗原量と染色強度に相関が見られたが、血清 SCC 抗原量と組織中 SCC 抗原量の間には、明瞭な関連は、見出せなかった。

314 悪性腫瘍におけるCarbohydrate Antigen 72-4(CA 72-4)の検討

加藤義郎、和田祐爾、高橋利明、辻野大二郎、染谷一彦(聖医大・三内) 高橋孝子、山下あけみ、菊池いづみ、板垣勝義、石川徹(同・放部核)
佐々木康人(群大・核)

Colcher らにより報告された糖鎖抗原 CA 72-4 は、乳癌肝転移細胞から得られたモノクローナル抗体によって認識された糖蛋白抗原である。

今回、我々はエルザ CA 72-4 キットを使用する機会を得たので、その臨床的検討を行なった。臨床的 Cut off 値は 4 u/mlとした。悪性腫瘍では、肺癌(60%)、大腸癌(44%)、胃癌(30%)で高い陽性率が得られた。良性疾患の陽性率は 2.5%と低率であった。また、他の腫瘍マーカーとの組み合わせ測定についても検討した。

315 血清肺癌胎児抗原 Pancreatic Oncofetal Antigen(POA)測定キットの基礎的ならびに臨床的検討

斎藤康子、高田忠敏、安田秀喜、内山勝弘、四方淳一(帝京大学第一外科) 国安芳夫、東静香、小玉門弘、新尾康男(帝京大学病院放射線科)

POA 測定キットの基礎的検討を行うと共に肺癌患者を中心に血清 POA 値を測定しその有用性を検討した。基礎的検討の結果から、現在の測定系は臨床で十分使用可能であった。健常者の Mean ± S.D. は $3.1 \pm 0.9 \text{ U/ml}$ で、カットオフ値を 6.0 U/ml とした。POA の陽性率は肺癌 70%、急性肺炎 64%、肝細胞癌 55%、肝障害 55% で、胆道癌、慢性肺炎、良性胆道疾患、その他の悪性腫瘍は夫々 46%, 25%, 35%, 42% であり、肺癌と慢性肺炎や胆道癌の鑑別診断において POA 値の測定是有用と思われた。さらに、肺癌の早期発見のために POA と CA 19-9 とのコンビネーションアッセイは有用と思われた。

316 改良型ポール固相抗体を用いたCA 19-9 キットの使用経験

高橋孝子、山下あけみ、菊池いづみ、岡田崇子、板垣勝義、石川徹(聖医大放射線部核医学)
加藤義郎、和田祐爾、高橋利明、辻野大二郎、染谷一彦(同大第三内科)

CA 19-9 は現在も広く利用されている腫瘍マーカーの一つである。本キットは固相化抗体の表面積を増やす目的で、プロペラ状のプラスチック板の数を増やし、形状もポールタイプとしている。振とうを加える事により、反応温度も室温で、反応時間も短縮され、全測定操作も約 5 時間で終了する。この改良型ポールエルザ CA 19-9 キットを検討する機会を得たので、その使用最適条件等につき報告する。

317 脳癌診断における血清脳マーカー測定の意義

柴田時宗 早川哲夫 酒井雄三(名古屋大学第二内科)

脳癌診断における血清脳マーカーの役割は ERCPなどの形態学的検査にいたる契機となることである。われわれは現状において、感受性・特異性が高いとされるエスラターゼ 1 (IRE)と CA19-9 を用い、脳癌診断における役割を検討した。脳癌40例(頭部癌27例、体尾部癌13例)を対象とし、IREはダイナネット社製 RIA キット(<410ng/dl), CA19-9はセントコア社製 RIA キット(<87U/ml)にて測定した。全体での陽性率は IRE は 70%, CA19-9 は 68% であった。部位別では頭部では IRE は 89%, CA19-9 は 59% であり、体尾部ではそれぞれ 81%, 85% であった。一方、切除の可否でみると切除可能例(18例)では IRE の陽性率は 88% と高率であったが、CA19-9 は 56% に留まった。IRE の高値例に切除可能な比較的早期の脳癌が多く、CA19-9 高値例では切除不能例が多かった。両者の組合せ診断での陽性率は 95% と高率であった。